

## 母親の主観性を捉える試み

—共通のビデオクリップを使用した実験的方法の妥当性—<sup>1)</sup>

上 嶋 菜 摘<sup>2)3)</sup>      島 義 弘<sup>3)</sup>

### 問題と目的

乳児期の子どもと養育者<sup>4)</sup> (以下、母親) の母子相互作用は、母親側からのかかわりによるところが大きく、子どもにどうしたらかかわりやすくなるのかという具体的な援助が求められているといえよう。本研究では、母親がどのようなものごとを自身のかかわりと関係付けることができるのかについて把握するための、実験的方法の妥当性および限界点について検討することを目的とする。具体的には、実験的方法で得られた回答に、母子相互作用の中で母親が自身のかかわりと関係付けているものが反映されているのかについて検討する。

これまでの乳幼児期の子どもと母親の母子相互作用や親子関係の研究は、主に発達心理学と乳幼児精神医学(保健)の2つの分野において研究が盛んに行われてきた。発達心理学の領域では、母親から乳児に対してなされるかかわりを捉える際に、母親による乳児の心的状態の読み取りが重要視されてきた。例えば、母親が子どものどのような思考や欲求、感情といった心的状態を読み

取ったのかとその後のかかわりには関連があることが報告されており (Sorce & Emde, 1982), 母親が乳児の情動表現<sup>5)</sup> に気づくことや母親が乳児の行動を心的状態の観点から捉える力の重要性が指摘されてきた (Emde & Sorce, 1988; Fonagy & Target, 1997)。このような流れを受けて、近年、Mind-mindedness (Meins, 1997) や Insightfulness Assessment (Oppenheim & Koren-Karie, 2002) といった養育者による子どもの心的状態の読み取りに関する測定法が開発され、さらに研究が進められるようになった。例えば、Meins (1997) は、幼い子どもであってもすでに心的世界を有した存在であるとみなして心的観点から子どもにかかわろうとする傾向を Mind-mindedness とよび、母親の声かけに占める子どもの心の状態に関する言及を指標とすることを提案した。そして、子どもが生後6ヵ月時点において母親が乳児の心の状態に関する言及を多くしていることは、つまり Mind-mindedness が高いことは、後の12ヵ月時点における子どもの愛着タイプと関連していることが示されている (Meins, Fernyhough, Fradly, & Turckey, 2001)。このように、母親による乳児の心的状態の読み取りは、母親が“子どもに与える影響”との関連に焦点が当てられてきた。母子相互作用における母親のかかわりとの関連では、篠原 (2006) により、日本人親子を対象として、Mind-mindedness が高い母親と低い母親では、子どもに対する行動に質的な違いがあることが示されている。また、Oppenheim & Koren-Karie (2002) は、子どもの行動の背景に想定される感情や思考、動機などを洞察する力を Insightfulness とよび、Insightful な母親は子どもに対する感性が高いことが示されている (Koren-Karie & Oppenheim, 2002)。このように、乳児の心的状態の読み取りについては、母親が“子どもから受ける影響”が示されており、母親は子どもから影響を受けてかかわっているといえる。

しかし、乳児に対するかかわりは、「興味がある」「楽しい」といった乳児の心的状態に規定されて決まるとは考えられにくい。乳幼児と母親の相互作用を観察してい

- 1) 本研究は、第一著者に対する発達科学研究教育センターの平成20年度発達科学研究教育奨励賞の助成を受けて実施されたものである。
- 2) 日本学術振興会特別研究員
- 3) 名古屋大学教育発達科学研究科
- 4) 子どもを育てる養育者は母親だけではないが、本研究では主たる養育者として母親という表記に統一している。
- 5) 本研究では、乳児の感情状態に関する用語として情動や心的状態、内的状態という用語を用いている。感情に関する用語は日本語においても外国語においても多様であり、先行研究で定着している用語を用いることが一般的である (小原, 2005)。本研究では、先行研究で定着している用語がある場合にはその用語を使用し、本研究で扱ったカテゴリーについては内的状態という表記に統一することとする。

る場合には、母親が乳児の行動の背景に意図や感情を把握するのと同様に、観察者には乳児の行動の背景だけでなく、母親の行動の背景にも意図や感情といったものが把握される。この点について、鯨岡(1986, 1989)は、母親から乳幼児に対するかかわりの背景に想定される母親自身の動機や意図、感情といったものを主観性と総称している。そして、母子相互作用の関与観察者に、母子相互の行動の背後にある主観性が間主観的に把握される現象について指摘している。例えば、食事場面の関与観察者に、子どもの側に食べたいという気持ちがあるかどうかだけではなく、母親の側にも「ごはんをもっと食べてほしい」という気持ちがあることが把握されるということである。また、青木・馬場・出蔵・古川(1999)は、母子相互作用の中で母親から情動調律行動がなされた場面を取り出し、母親にその時の気持ちを尋ねることによって調律行動時の母親の主観的体験を検討している。青木ら(1999)の結果では、調律行動場面の振り返りにおいて母親に意識された主観的体験として、乳児の情動状態を共有した乳児との一体感のみでなく、母親自身の「かわいい」といった感情や乳児の行動を変えるような「もっと笑わせたい」といったコントロール意図についても回答されていた。これらからは、母親自身の動機や意図、感情といった主観性が乳児に対するかかわりに関与していることがうかがえる。しかし、母親の主観性に関する研究はこれまでのところ非常に少なく、母親がどのようにかかわるのかという内容との関連や、母親の主観性が母親自身にとってはどの程度意識されるのか、といった問いについては明らかにされていないのが現状である。

母親の主観性を取り扱った方法論としては、母子相互作用の関与観察や母子相互作用の録面の振り返りという手法が用いられてきた。個々の母子関係の問題や母子相互作用パターンの特徴を把握する際には、母子相互作用の観察や振り返りを基にした手法も有用であろうが、母親の特性や子どもの月齢との関連といった基礎的な資料を把握する上では限界もあった。まず、関与観察者によって間主観的に把握する手法(鯨岡, 1986, 1989)では、そこで把握された内容が母親自身に意識されるものと同じであるかどうかは不明であるといわざるを得なかった点が挙げられる。また、母子相互作用場面を後から振り返ってもらった手法では、母親の回答が母子相互作用場面や子どもの要因から影響を受けているという点が挙げられる。子どもの心的状態の読み取りに関しては、篠原(2006)が、Mind-mindednessに関する諸要因の実証的知見に基づく検証を行うために実験的手法を提案している。具体的には、すべての母親に共通の乳児の映像を刺

激として用いることによって、母親の特性としてMind-mindednessの個人差を測定することを可能にした。母親の主観性に関して実証的知見に基づく研究が少ないという現状を踏まえると、篠原(2006)同様に、複数の母親に対して共通の乳児の映像を素材とした実験的手法を用いることで観察場面や子どもの要因を統制し、母親の主観性に関して基礎的な検討をすることが必要であると考えられる。母子間のやりとりは、乳児が発する心的状態のサインあるいは母親によるその読み取りのみによって一義的に決まり展開していくものであるとは考えられにくい。乳児の心的状態が重視されてきたように、母親側のかかわりの背景にある主観性の関与についても考慮することで、よりダイナミックな母子相互作用の把握が可能となるだろう。

これらを踏まえて、上嶋(2008)は、母親は、乳児の心的状態や自分自身の主観性のありようといったものごとを含めて、乳児にかかわる際にどの程度、あるいはどのようなものごとを関係付けているのかを検証するために、乳児の映像を素材として提示しながら半構造化面接を行った。具体的には、乳児を映したビデオクリップを素材として提示し、どのようにかかわるのかを想起させた後、「どのようなところからそうかかわるのか」について尋ねた。その結果、母親は、乳児の心的状態のみでなく、自分自身の意図や感情状態といった主観性や、育児の経験に関する情報、場面の状況といった環境要因を自身のかかわりと関係づけていたことが示された(上嶋, 2008, 2009)。また、母親の主観性は、母子相互作用研究の中で重要視されていた母親による乳児の心的状態の読み取りと同等の頻度で回答されていた(Ueshima, 2008)と同時に、乳児の心的状態の読み取りと関連する内容が多く含まれること(Ueshima, 2009)が示された。しかし、母親にとって見知らぬ乳児を素材として提示していたため、半構造化面接において母親に回答された内容が、現実の母子相互作用をどの程度反映しているのかという不明な点が残されていた。今後、乳児の心的状態に関する母親の読み取りに加えて、母親の意図や感情状態といった主観性について把握できる簡便な手法として実験的方法を用いるためには、共通の映像に対する反応と自子に対する反応の相違について押さえておく必要があるだろう。

以上から、本研究では、同一の母親に対して、母親が育てる子どもとの母子相互作用場面と、共通のビデオクリップの二つを素材として同じ内容の半構造化面接を行い、ビデオクリップを用いる妥当性および限界点について検討することを目的とする。

## 方法

### 研究協力者

研究協力の依頼は、子育て支援センターおよび小児科外来にて個別に行い、同意が得られた8~11ヶ月児の母親14名を対象とした。母親が育てる子どもの性別は、男児8名、女児7名であった。子どもの月齢は平均9.5ヶ月(8.5ヶ月~11.8ヶ月)であった。母親の年齢は、平均30歳(25歳~40歳)であった。

### ビデオクリップの選定

ビデオクリップには、協力者とその子どもとの相互作用を撮影した中から抽出した5本と、著者が用意した共通のビデオクリップ5本の併せて10本(各15秒)を用いた。協力者と子どもの相互作用場面は、研究協力に同意が得られた日あるいは後日撮影のために訪問した際の映像から作成した。作成の基準は「どのようにかわるのか」について回答された内容をKJ法でまとめた結果(上嶋, 2008)を参考に、5つの条件を設定した(Table 1)。そして、母子相互作用場面としては、Table 1に示した5つの条件を満たす場面を含む約15秒を編集して用いた。協力者によっては、すべての条件に該当する場面を抽出できない場合もあったが、その場合には他の条件から複数クリップを含めた5クリップを作成して用いた。それぞれの協力者について該当があった条件をTable 2に示した。共通刺激の内容はTable 3に示した。

### 面接の手続き

撮影日から約2週間を目安とし、再度、協力者の自宅(8人)あるいは研究協力を依頼した機関(7人)を訪問

し、個別に、ノートパソコンに乳児が映っている15秒のビデオクリップを提示しながら半構造化面接を行った。面接では母子相互作用場面から作成した5本のクリップを先に提示し、続いてTable 3の5本のビデオクリップを提示した。各ビデオクリップを提示した後に2つの質問を行った。協力者が育てる子どもとの相互作用場面を刺激として用いた場合には、質問1の回答に当たる部分はビデオの提示とともに簡単に伝え、母親が自身のかかわりと関係付けていたものごとを尋ねるために「そのようにかかわるのはどのようなところからか」と質問した(例、「同じおもちゃを持ってきて一緒に振っているという場面ですが、そのようにするのはどのようなところからですか」)。共通のビデオクリップについては、一つめの質問で、母親に乳児に対するかかわり方を決定させるために「赤ちゃんがこのような様子のときにどのようにかわるのか」と質問した。この質問の回答に続けて、二つ目の質問では、母子相互作用場面と同様に「そのようにかかわるのはどのようなところからか」と質問した。面接中は協力者の許可を得て録音を行った。面接に要した時間は、約30分~1時間であった。面接の際には、協力者の子どもも同席しており、子どもがぐずったときには適宜中断し、母親の判断で面接を再開した。

### 分析方法

すべての面接記録から逐語録を作成した。二つ目の質問である「そのようにかかわるのはどのようなところからか」の回答を分析対象とし、Table 4の各カテゴリー「乳児の心的状態」、「乳児の行動」、母親の主観性の下位カテゴリーである「内的状態への働きかけ」、「母親自身の

Table 1 母子相互作用場面からビデオクリップを作成した基準

場面1	母親が、子どもを見守っている場面
場面2	母親が、子どもが扱っている玩具とは別の玩具を持ち込む場面
場面3	母親が、子どもの泣きやぐずりに対し抱っこ等の身体接触を行う場面
場面4	母親が、子どもが扱っている玩具と同じあるいは同種類の玩具を持ちこむ場面
場面5	母親が、子どもの動作に対して声やリズムを与えている場面

Table 2 研究協力者の母子相互作用場面から作成したビデオクリップの場面

研究協力者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
場面1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○
場面2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○
場面3	○	○		○	○		○	○	○	○			○	○	
場面4	◎	○		○	○	◎	○	○	○		○	○	○	○	◎
場面5	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

注) ○は1本のビデオクリップを、◎は2本あるいは3本のビデオクリップが該当することを意味する。

Table 3 共通に提示したビデオクリップの内容

クリップ1	体を低い棚へ向けて片手をかけ、ひざ立ちしている。カメラをみてから視線を床に移した後、手をかけていた棚へ体を向ける。カメラに背を向けたまま、お尻を上下に動かして、「わーわー」と声をだす。最後に、カメラへ顔を向けて「ブプー」と唇を鳴らす。
クリップ2	カメラと向かい合って歩行器に乗っている。手を振ってから顔を下に向け、右へと移動していく。すぐに止まって、顔をカメラへ向けた後、徐々に下を向いていく。
クリップ3	初めは上半身を起こして周囲を見回しながら泣いているが、次第に顔を床につけて泣き続ける。周囲には玩具が散らかっている。
クリップ4	布製の絵本を持って歩行器に乗っている。本を片手で持ち上げたり、両手で持ってひらこうとしたり、動かし続けている。視線は本と自分の手先を向いている。
クリップ5	手に持った玩具を床に置いてある玩具に何度もぶつけている。時折、手に持っている玩具を見たり、口元へ持っていったりする。

Table 4 分類に使用したカテゴリーと、その定義および回答例

【カテゴリー】	定義	例
乳児の内的状態	乳児の思考・情動・欲求等の内的状態に関する言及	「楽しそうにしているの」、「興味があるんだな」、「おなかすいた」
乳児の行動	乳児の様子や行動に関する言及	「しっかり握ってる」、「うろうろしてる」、「泣いてる」
乳児の内的状態への働きかけ	乳児の情動状態を調整するような意図や動機を含む内容	「もっと楽しくなるかな」、「安心感を与えてあげたい」
母親自身の感情	母親自身の感情や好奇心、願望やコントロール意図を含む内容	「いてもたってもいられない」、「私が触れていたい」、「笑って欲しい」
乳児への期待	乳児の現在の行動や将来の発達の変化を期待する内容	「覚えてくれたらいいな」、「やさしい子になってほしい」
母親希求	乳児から求められているという感覚を含む内容	「かまって欲しそう」、「この子が呼んでる感じがした」
共有・共感	乳児の内的状態に沿おうとする内容	「私も一緒に楽しみたい」、「楽しさや面白さを一緒にみつめてあげられたらいいな」
育児の経験	わが子の特徴や子どもに関する知識、育児の習慣や信念	「抱っこで泣き止むことが多いので」、「興味あるものに手を伸ばす時期なので」
環境	乳児の周囲の状況や観察環境に関する内容	「周りにおもちゃがたくさんある」、「手が届くところに何もなし」
その他	分類不能・無回答	「何となく」

感情」、「期待」、「母親希求」、「共有・共感」、「育児経験」、「環境」への言及の有無を確認し、上記のカテゴリーについて言及された回答の数をカウントした。

## 結果

それぞれの協力者の回答のうち、各カテゴリーに該当していた回答総数を Table 5 に示した。母子相互作用場面と見知らぬ乳児が映るビデオクリップの両方において、各カテゴリーに対して一定の回答数がみられた。また、それぞれの協力者と子どもの母子相互作用場面から全く同質の5場面をビデオクリップとして選定することは困難であったため、母子相互作用場面と共通のビデオ

クリップそれぞれで各カテゴリーに言及された回答数の合計を算出し、Table 6 に示した。母子相互作用場面を提示した場合に言及されたカテゴリーについては、共通のビデオクリップを提示した場合においても言及されることが確認された。母子相互作用場面での回答と共通のビデオクリップを素材とした場合での回答との間に、各カテゴリーの回答頻度に違いがみられるのかを検討するために対応のあるt検定を行った。その結果、カテゴリーの中で「乳児の心的状態」は、共通のビデオクリップを提示した場合に、母子相互作用場面を提示した場合の約2倍多い回答において言及されていた ( $t(14)=3.56, p<.05$ )。

Table 5 協力者ごとのカテゴリー該当回答数

協力者のID	母子相互作用場面								共通のビデオクリップ											
	乳児の内的状態	乳児の行動	乳児の内的状態への働きかけ	母親自身の感情	乳児への期待	母親希求	共有・共感	育児の経験	環境	その他	乳児の内的状態	乳児の行動	乳児の内的状態への働きかけ	母親自身の感情	乳児への期待	母親希求	共有・共感	育児の経験	環境	その他
1	1	1	3	1	1	1	2	1		3	3	1					4			
2	4	2	1	1			1	1		4	1	1				1	2	1		
3	1		1	2			1	1		3	1	1	2	1			2			
4	2		3	1	1		1	1		3		2			1					
5			2	3		1		1		1	2	1	3				1	1		
6	1		1	1	2			1		4		1	1	1	1	1				
7		1	1	3	1			1		4	3	1	2							
8	1	2	1	4			1	3		3		2	3			1	1			
9	3	1	3	2		1		1		2	2	2	1		1	1	2	1		
10	1		1	2	1		1			2	2	2	2	1			1			
11	2	2	1	1		2				1	2	1			1					1
12				2			1		2	3	2		1					1		
13	3		3			1	2	1		3	2	1	2			1				
14	3	2	2	2		1			1	4	2		1	1	2					
15		1	1	3				2		4	2		3					1	1	

注) 空欄は該当する回答がなかったことを示す。

Table 6 相互作用場面と共通のビデオクリップから得られた回答の各カテゴリー該当数

カテゴリー名	乳児の内的状態	乳児の行動	乳児の内的状態への働きかけ	母親自身の感情	乳児への期待	母親希求	共有・共感	育児の経験	環境	その他
母子相互作用場面	23	12	24	28	6	7	7	13	3	3
共通のビデオクリップ	44	19	19	21	7	6	5	15	4	1

考察

本研究の目的は、母子相互作用における乳児の内的状態の読み取り (Meins, 1997; Oppenheim & Koren-Karie, 2002) および母親に喚起される主観性 (鯨岡, 1986, 1989) を把握するための実験的方法妥当性および限界を検討することであった。

従来の母子相互作用の研究では、母子相互作用において上記の要因を関与観察者が記述したり、後から母親に質問をして述べてもらったりという方法が主流であった。しかしながら従来の方法では、母親の認識という観点から、母親のかかわりの背景に想定される乳児状態の

読み取りや、母親自身の主観性を抽出することには限界があった。また、母親の回答が、母子相互作用場面の状況や子どもの特徴から影響を受けている可能性も否定できなかった。これらの点を克服するために、本研究では、同一の協力者に対して、協力者が育てる子どもとの相互作用場面の映像と見知らぬ乳児の映像である共通のビデオクリップの両方を素材として、同様の手続きで半構造化面接を行うという実験的な方法を用いた。そして、母子相互作用において母親に意識される内容が、共通のビデオクリップを用いた実験的方法によっても捉えることができるのか否かを検討した。カテゴリーの出現頻度を求めた結果から、共通のビデオクリップを用いた場合に

も、母親が育てる子どもとの相互作用場面で得られる反応内容と同様のカテゴリーについて回答されることが確認された。また、出現頻度という点においては、ほぼ同等の回答数が得られることが確認された。ただし、乳児の内的状態については母子相互作用場面と共通のビデオクリップで違いがみられ、共通のビデオクリップを用いた場合には、わが子との母子相互作用場面を振り返る場合と比較して、母親は、乳児の内的状態を自身のかかわりと関係づけていた回答数が約2倍であった。この違いは、研究協力者と調査者が撮影場面を共有していたために、乳児の内的状態、つまり母親にとってこの場合はわが子の内的状態は暗黙のうちに調査者と共有されたものとして処理され、言及されなかった可能性が考えられる。また、見知らぬ乳児に対してどのようにかかわるのかを回答するためには、初めてみる乳児の内的状態に対してより注意を払わなければならない可能性も考えられる。いずれの可能性においても、協力者の数が少数であるため解釈は慎重に行う必要があるが、共通のビデオクリップに対する反応を検討する際には、母親が乳児の内的状態に着目しやすいうことに留意する必要があるだろう。しかし、共通のビデオクリップを母親に提示しても従来注目されてきた乳児の内的状態に関しては回答数が減少するものではなかった。また、これまで実証的研究が少なかった母親の主観性に関するカテゴリーや育児経験、環境については、共通のビデオクリップを母親に提示した場合においても一定数捉えることができていた。これらのことから、母親の認識という観点から、母親が乳児期の子どもに対する自身のかかわりと関係付けることができるものごとを捉える場合には、ビデオクリップを素材とした実験的方法を用いることができると結論付けられよう。

母親の主観性は、その存在や母子相互作用への関与が指摘されること自体は目新しいものではないが、母親の認識という観点からの実証的研究は行われてこなかった。今後、母親の主観性について、子どもの月齢と母親に喚起され易さとの関係や、子どもの月齢によって喚起されやすい内容との比較、子どもの側に発達にアンバランスさがあり子どもの内的状態が読み取りにくいという場合との関連について、子どもの内的状態と同様に基礎的な知見の蓄積が必要であろう。母子間の問題を取り扱う場合には個別の母子相互作用を検討する意義も大きいですが、基礎的な知見を得るためには、本研究で用いた方法が簡便かつ侵襲性の低いツールとして有用であると考えられる。母子間の相互作用は、乳児の内的状態や行動といった子ども側の要因にのみに帰属されて展開するものではない。子どもに対するかかわりの背景に生じる母親

の感情や意図といった主観性を検討することで、母子相互作用をよりダイナミックなものとしてとらえていく必要があるだろう。

## 引用文献

- 青木紀久代・馬場禮子・出蔵みどり・古川真弓 (1999). 調律行動場面における母親の主観的体験. 心理臨床学研究, 16, 521-528.
- Emde, R. N. & Sorce, J. F. (1983). The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In Coll, J. D., Galenson, E., & Tyson, R. L. (Eds.), *Frontiers of Infant Psychiatry*, New York: Basic Books.
- (小此木啓吾 (監訳) (1988). 乳幼児からの報酬: 情緒応答性と母親参照機能 乳幼児精神医学 東京: 岩崎学術出版社 pp.35-48)
- Fonagy, P. & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9 (1997), 679-700.
- Koren-Karie, N., Oppenheim, D., Dolve, S., et al., (2002). Mothers' insightfulness regarding their infants' internal experience: Relation with maternal sensitivity and infant attachment. *Developmental Psychology*, 38, 534-542.
- 鯨岡峻 (1986). 母子関係の間主観性の問題. 心理学評論, 29, 506-529.
- 鯨岡峻 (1989). 母と子のあいだ 初期コミュニケーションの発達. 東京, ミネルヴァ書房.
- Meins, E. (1997). Security of attachment and the social development of cognition. Hove, England, Psychology Press.
- Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E., et al. (2001). Rethinking maternal sensitivity: Mothers' comments on infants' mental processes predict of attachment at 12 months. *Journal of Child Psychology*, 42, 638-648.
- 小原倫子 (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. 発達心理学研究, 16, 92-102.
- Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. (2002). Mothers' insightfulness regarding their children's internal worlds: The capacity underlying secure child-mother relationship. *Infant Mental Health Journal*, 23, 593-605.
- 篠原郁子 (2006). 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発—母子相互作用との関

- 連を含めて. 心理学研究, 77, 244-252.
- Sorce, J. F. & Emde, R. N. (1982). The meaning of infant emotional expressions: Regularities in caregiving responses in normal and down's syndrome infants. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 23, 145-158.
- 上嶋菜摘 (2008). 乳児とのかかわりにおいて母親が用いる手がかりの検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科修士論文 (未公刊).
- 上嶋菜摘 (2009). 乳児に対する母親のかかわりに影響を及ぼす要因—乳児の月齢を考慮した探索的検討— (中間報告). 発達科学研究教育センター紀要, 23, 209-213.
- Ueshima, N. & Obara, T. (2008). Mother's Perception of Infant Emotion: focus on infant and/or broader

context. *Abstracts, XVI<sup>th</sup> International Conference of Infant Studies*, 151.

- Ueshima, N. (2009). Mothers' Responses to Their Infants: Focus on Mothers' Perception of Infants State and/or Mothers Own States. *Abstracts, Society for Research in Child Development 2009 biennial meeting*, 121.

### 謝辞

本稿をまとめるにあたり, ご指導くださいました名古屋大学の永田雅子准教授に深く感謝いたします。また, 研究の動機づけを与えてくださった愛知江南短期大学の小原倫子先生, 小林邦江先生, 研究にご協力くださいましたご家族に心より感謝いたします。

(2009年11月15日受稿)

ABSTRACT

Mothers' Subjectivity in Mother-Infant Interaction:  
The Validity of Experimental Method

Natsumi UESHIMA, Yoshihiro SHIMA

This study examined methodological validity and its limitation of measuring mothers' subjectivity and perception of infants' emotion. Fourteen mothers of nine month old infants were participated semi-structured interview. They were showed short video clips of mother-infant interaction which were videotaped before the interview, and infants of nine month old who were not mothers' own children. After they were showed each video clip of mother-infant interaction, they were asked why they would select such a response for the infant. After they were showed each video clip of strange infant, they were asked what they would do in such situation and they were also asked the same question above. The contents abstracted from the later question were compared between the video clips of mother-infant interaction and those of strange infant. Mothers' responses were coded when they referred one of the following categories; infants' emotion, infants' behavior, mothers' own subjectivity, child-care experiences, and surroundings of the infants. The results showed that mothers' subjectivity to the infants was abstracted by the interview showing video clips of strange infants as much as by the interview showing their own infants, although infants' emotions were much more abstracted by using strange infants. It was suggested that experimental method using video clips of strange infants would be useful to abstract mothers' subjectivity and perception of infants' emotion. The limitation and future direction were discussed.

Key words: mother's subjectivity, infants' emotion, experimental method, validity